



Vol.9 No.2
 発行人 井上 順孝
 編集人 平藤喜久子
 〒150-8440 東京都渋谷区東
 4丁目10番28号
 電話 (03) 5466-0104
 FAX (03) 5466-9237

ミュージアム連携事業「博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究」国学院大学博物館国際シンポジウム・ワークショップ二〇一五

本企画は、平成二十七年年度文化庁の「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」に採択された「東京・渋谷から日本の文化を国際発信するミュージアム連携事業」の日本文化研究拠点の国際連携を主眼としたイベントの一環であり、日本経済新聞社、日仏会館・フランス日本研究センター、全日本博物館学会、渋谷区の後援を得て、平成二十七年十二月十一〜十三日の日程で実施した。

一、開催趣旨

海外の博物館における日本の資料、美術品の展示は、その国の日本



文化研究、教育のまさに最前線であるといえる。二〇〇九年に大英博物館で開催された『The Power of DOGU』展は、連日多くの来場者で賑わい、これまで日本の縄文土偶に馴染みのなかった人々にも、広くその文化的価値を伝える契機になったことは記憶に新しい。そうして日本文化への興味を抱いた人々が、さらに資料の理解を深め、日本文化の理解へと歩みを進めていくためには、展示で完結するのではなく、もう一歩踏み込んだ工夫を提供することが必要だろう。その有効な仕掛けの一つに、日本の専門的な博物館とのオンライン上での提携が挙げられる。今回のシンポジウムでは、海外で日本関連の資料を展示、研究している博物館から担当の学芸員等を招き、それぞれの博物館の現状を報告し、日本の博物館にどのような情報発信を求めるかを発題していただいた。その上で、日本側のパネリストたちと討議を行い、情報化時代とい

目次

- ◆ミュージアム連携事業「博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究」国学院大学博物館国際シンポジウム・ワークショップ二〇一五……………1
- ◆日本文化研究所設立六〇周年記念公開学術講演会
「現代宗教は古代宗教と何が違うか?—宗教進化論再考—」……………4
- ◆日本文化研究所設立六〇周年記念国際研究フォーラム「日本文化」研究の展望……………5
- ◆第四十一回日本文化を知る講座「日本文化」研究のこれまでとこれから……………6
- ◆平成二十七年国学院大学博物館活動報告……………8
- ◆平成二十七年国学院大学博物館ミュージアム連携事業・報告……………10
- ◆二十一世紀研究教育計画委員会研究事業
「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」活動報告……………12
- ◆彙報……………13
- ◆資料紹介「香取神宮神幸祭絵巻」……………16

われる現代の状況にもとめられる博物館の国際的ネットワークのあり方を展望した。

二、フィールドトリップ

十二月十一日は、翌日の国際シンポジウム・ワークショップのプレイベントとして、招聘者らに連携館を含めた国内の博物館、美術館を観覧いただくことを目的に、フィールドトリップを実施した。

午前は、永青文庫、午後は当館、山種美術館、東洋文庫というルート。細川家に伝来する歴史資料や美術品等を収蔵展示する永青文庫では、大きな話題になった春画展を観覧。同展覧会の実行委員会の浦上満氏にも多大なるご配慮をいただいた。

国学院大学博物館では、企画展「神仏・異類・人—奈良絵本・絵巻にみる怪異—」や常設展の校史・神道ゾーン、考古ゾーンを観覧。シンポジウムに合わせ、普段は複製を展示している重要文化財の「石枕」の実物を



フィールドトリップ (永青文庫)



フィールドトリップ (右：山種美術館、左：東洋文庫)

展示した。その後、日本初の日本画専門美術館でもある山種美術館へ移動し、山崎館長の解説に学芸部長の同時通訳を加え、「特別展『裸婦図』重要文化財指定記念村上華岳―京都画壇の画家たち―」を中心に、海外で普段見ることができない日本画の魅力を堪能した。

最後は、世界屈指の東洋学の専門図書館である東洋文庫へ移動し、岡崎学芸員の解説により、常設展示の見どころとなる資料やモリソン書庫、企画展「幕末展」等を観覧。アジアから見た日本像が語られた多様な資料は海外招聘者の興味を惹くものであった。

三、国際シンポジウム

初日は、國學院大學渋谷キャンパス内の常磐松ホールを会場に国際シンポジウムを開催した。冒頭、開催に先立ち、井上順孝(本学研究開発推進機構長)による趣旨説明、萬谷宏之氏(文化庁文化財部美術学芸課長)のご挨拶の後、各セッションへ移った。

〈第1セッション〉は、アメリカ・ボストン美術館のアン・ニシムラ・モース氏による「ダブル・インパクト・博物館の国際化と日本」。同館と東京芸術大学が一昨年四月に行った展覧会「ダブル・インパクト・明治ニッポンの美」等の開催時に実施された展示品のデジタル化や、日米での展示内容の検討等、さまざまな取り組みが紹介され、国際的なネットワークに日本の美術館・博物館が参画していく上での具体的な課題と

要望が提示された。

〈第2セッション〉は、イギリス・セインズベリー日本藝術研究所のサイモン・ケイナー氏の「ギャラリーの超越・ハイパー空間の土偶 新メディアと博物館」。氏が関わった縄文土偶の二つの展示「[The Power of Dogu]展(大英博物館、'unearthed'展(セインズベリー視覚芸術センター)」の比較を通じ、イギリスでの両展覧会成功の背景と根拠が示されるとともに、日本の先史時代・古代文化における最新の日英間オンラインリソースの取り組みについての紹介と提案がなされた。

〈第3セッション〉は、オランダ・ライデン国立民族学博物館のマティ・フォラー氏による「国立民族学博物館の日本コレクション」。日本の文政年間の「タイムカプセル」とも称される同館の包括的なコレク



国際シンポジウム・セッション

ションの紹介とともに、ヤン・コック・ブロンホフ、ヨハン・ファン・オーフェルメール・フィッセル、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトという3人のコレクターの収集方針の違いから見えるコレクション形成の歴史的背景等が示された。

〈第4セッション〉は、フランス・ギメ美術館のミシェル・モキユエール氏による「ギメ国立東洋美術館(パリ)、そのコレクションの歴史」。縄文時代から近代までの1万1千点におよぶ同館の日本コレクションの紹介とともに、コレクション形成の歴史的背景や同館の近年の取り組み、在欧博物館等保管日本仏教美術資料データベース等の紹介がなされた。

〈第5セッション〉は、ロシア・ピョートル大帝記念人類学・民族学博物館(クンストカメラ)のアレクサンダー・シニツィン氏による「ロ



国際シンポジウム・総合討議

シア科学アカデミー人類学・民族学博物館(クンストカメラ)の日本コレクション概要―歴史、特色、コレクターたち、代表的な収蔵品、調査と保管のための日本のパートナーとの協力―。三百年間にわたる十二ヶ国・百六十人を超えるコレクター・寄贈者からなる国際チームによって形成された、日本人の実生活が窺い知れる一万点超の日本コレクションについての時代構成別紹介とともに、近年、同館と日本の多数の組織と実施してきた共同プロジェクトについて紹介がなされた。

〔第6セッション〕では、井上洋一氏(東京国立博物館)による、五氏のパネル発表に対するコメントを受け、司会の中牧弘允氏(吹田市立博物館、国立民族学博物館)を交え、フロアからの質問や意見を取り入れながら活発な総合討議が行われた。国際的な博物館ネットワークを構築していくことの重要性が確認され、初日シンポジウムは幕を閉じた。

四、ワークショップ

翌日のワークショップでは、笹生衛(当館館長)による挨拶と趣旨説明の後、オーストリア応用美術博物館のヨハネス・ヴィーニンガー氏による「博物館の未来はデジタル化だけではない」というテーマ発表から(第1セッション)の口火が切られた。ヴィーニンガー氏は、情報化社会における、知識の共有や国際交流の支援に大いに貢献しているデジタル情報の重要性を強調する一方で、「現物」が持つ情報の重要性の再認

識についても提言した。

〔第2セッション〕は、フランス・日仏会館のクリストフ・マルケ氏による「フランスの図書館や美術館の和古書コレクション」と日本文化研究「。これまで活用がされてこなかった十九世半末にフランスで形成された和古書(版本)コレクションの活用事例の報告とともに、海外における日本文化研究への今後の活用の可能性について提言された。

〔第3セッション〕は、東京大学のイローナ・バウシュ氏による「オランダにおけるシーボルトのコレクションの日本考古学遺物について」。現在、オランダ・ライデンのシーボルト博物館に収蔵されている日本コレクションの内、注目されてこなかった考古学遺物に焦点が当てられ、コレクションに関する新たな知見が提示された。

〔第4セッション〕は、西南学院大学博物館の宮崎克則・阿部大地両氏による「西南学院大学博物館とシーボルトの収蔵品」。西南学院大学博物館が所蔵するシーボルトコレクションの紹介がなされ、コレクションの現状と今後の活用方法が提言された。

〔第5セッション〕は、内川隆志(当館教授)による「欧州における日本コレクション形成の一視点―H.V.シーボルトと明治初期の好古家たち―」。これまで当館が実施してきた海外交流の実績や、学術情報の海外発信に関する取り組み等の紹介の後、海外に所在する日本コレクションの形成に関わった日本側の具体的

な動向について報告がなされた。

〔第6セッション〕は、永青文庫の三宅秀和氏による「永青文庫と日本国外の博物館との連絡と、その問題点について」。近年、海外で開催された永青文庫所蔵品による展覧会や、開催中の春画展等の事例から、国際ネットワークの現状と種々の課題が提示された。

〔第7セッション〕は、東洋文庫の岡崎礼奈氏による「東洋文庫ミュージアムにみる歴史資料展示の可能性と課題」。約百万点の資料を所蔵する世界屈指の東洋学専門図書館である東洋文庫ミュージアムの展示実例紹介とともに、国際的な情報発信の課題について提言された。

〔第8セッション〕は、山種美術館館長の山崎妙子氏による「グローバル化を見据えた近年の取り組みについて」。日本初の日本画専門美術館として創立した山種美術館の現状報告と、海外への情報発信に向けた課題が提示された。

〔第9セッション〕の総合討議では、ワークショップ各登壇者から提示された課題をもとに、初日のパネリストやフロア参加者も交え、具体的な国際ネットワークの形成方法や、日本文化を海外発信していく上での具体的な課題に対する活発な議論が行われた。まとめとして、海外と日本の相互理解の上に新たな文化的価値を創造していくことが確認共有され、三日間のイベントは締めくくられた。

(文責・石井匠)



ワークショップ・総合討議(右:登壇者、左:フロア)

日本文化研究所設立六〇周年記念公開学術講演会

「現代宗教は古代宗教と何が違うか？—宗教進化論再考—」

井上 順 孝（國學院大學教授・同研究開発推進機構長）

平成二十七年（二〇一五）年度の研究開発推進機構公開学術講演会は、本学研究開発推進機構長・神道文化学部教授の井上順孝氏を講師として、「現代宗教は古代宗教と何が違うか？—宗教進化論再考—」の演題で、十月二十四日（土）十五時から本学常磐松ホールにて開催された。本講演会は、昭和三十（一九五五）年に設立された日本文化研究所（平成十九（二〇〇七）年より研究開発推進機構内の一機関）の六十周年記念事業の一環として、翌二十五日の国際研究フォーラムとともに「日本文化」研究の展望」を共通テーマとして企画されたもので、学内外から約百三十名の参加があった。

講演の概要

井上氏はまず本講演の趣旨を、「宗教は歴史的に多様な展開をし、今日



の状況に至っているが、日本の宗教文化という観点からすると、現代宗教の多様性とそこに至るダイナミズムはどう捉えられるか。ダーウインの進化論の意味、特に淘汰という概念を再考し、近年の脳科学や認知科学系の研究を参照して、新しい研究視点を提示することを試みる」ことだと述べた。

そして、日本の宗教状況を概観するなかで新宗教の特性に論を進め、その多様性と共通性を論じ、宗教史的研究と機能主義的理論の視点をそれぞれ紹介した。

しかし、宗教史を総体的に捉え、見通しを得るには、進化論の再考が必要である。それには、脳科学や進化生物学、進化心理学などの研究成果が大いに参照できる。従来の宗教進化論は宗教の進化を単線的に考えがちだったが、実際の宗教史の展開は非常に複雑である。また、淘汰という考え方も、単純に弱肉強食ではなく、現在生き残っているものはそれぞれ進化と淘汰を経たものと考えられる、と論じた。

次に、人間の文化を考える場合、外的環境に加え、脳内の信念体系などニューロンのネットワークに基づく内的環境を考える必要がある。その上で、例えば先祖供養・神観念の広がり・宗教の共同体志向などは、

それぞれ生物進化における相似・相回・収斂のアナロジーとして捉えられるのではないか。このように生物現象を文化現象と比較すると、実際の現象を理解する上で応用度が高い、との考えを述べた。

現代宗教から宗教史を探るためにヒントとなるのが、R・ドーキンスの「ミーム（文化的遺伝子）複合体」という発想である。つまり、現代社会で大なり小なり影響力を持っているミームは、歴史的にそれなりの社会的・文化的淘汰を経ているのではないかという考えになる。生き延びられるミーム複合体か、生き延びられないミーム複合体か、という議論である。宗教文化の多様性と共通性、広がりやすい宗教とそうでない宗教といった問題を考えるには、かなり参考になると思われる。ただし、宗教文化の場合には非連続的な要素への着目も必要であると同時に、宗教の定義の再考も迫られる。

さらに、現代宗教から古代宗教へと目を向けていく際の方法としては、分解・分析から仕組・仕様を遡ろうとする「リバースエンジニアリング」的発想が応用できる。あらゆる知覚について、生まれた時すでに多くの認知の仕方がインプットされており、遺伝的にものの見方・考え方を左右する可能性は、宗教を考える上でも非常に重要であることを、具体例をもって示した。

講演の最後に井上氏は、存続している宗教現象は進化の過程にあると言え、それは善か悪かという理性的な価値判断とは基本的には別の次元

の議論であることを確認した。しかしその上で、対象を前にしてより基本的と思われる事柄への具体的な疑問を見つけること、宗教を研究する上で欠かせないものを見つけ、それらと取り組むことの重要性を強調した。

なお、本講演内容の詳細については、『國學院大學研究開発推進機構紀要』第八号（平成二十八年三月刊行）に収録される予定である。

**

**

また、本講演会に前後する十月二十三日（金）～二十五日（日）の間、同じく六十周年記念事業の一環として、特別展示「写真で見る日本文化研究所の六十年」が常磐松ホール前の多目的ホールにて実施された。草創期の人物・建物、これまでの講演会やシンポジウムの様子など、研究所の歩みを約六十枚の写真パネルで振り返った。来場者の多くも足を止め、展示に見入っていた。

（文責・塚田穂高）



日本文化研究所設立六〇周年記念 国際研究フォーラム「日本文化」研究の展望

去る一〇月二五日に、国際研究フォーラム「日本文化」研究の展望が行われた。前日に行われた公開学術講演会と合わせて、日本文化研究所設立六〇周年の記念行事となる。

本フォーラムは「日本文化」研究の新たな展望について検討することを目指した。様々な切り口から研究を行っている研究者四名に発題をお願いし、その後井上順孝氏(日本文化研究所長)によるコメントを受けて総合討議を行った。なお、司会者は松村一男氏(和光大学教授)にお願

いした。以下、内容を紹介する。
発題(一)「DNAで読む日本人の形成史」篠田謙一氏(国立科学博物館人類研究部長)

篠田氏は、日本人の形成史について、DNA研究によって新たな知見がもたらされていることを述べた。現代日本人をDNAから見ると、縄文人だけでなく、弥生時代以降に渡ってきた集団からも強く影響を受けている。他方、北海道では縄文人



篠田謙一氏

「日本文化」研究の展望

とオホーツクから渡ってきた人々との混合が見られ、また琉球についても独自の展開を遂げたことが確認できる。このように見るならば、縄文から弥生へという単純な図式ではなく、むしろ列島内の諸集団の複数性に目を向け、総体として日本人の起源を考えなければならぬとした。

発題(二)「Religion as Anthropomorphism: A Cognitive Theory」スチュワート・ガスリー氏(フオードム大学名誉教授)

ガスリー氏は、宗教という言葉を用いる際に、人間と人間ではない人格的存在との間に見かけ上何らかの関係を想定すること、つまり神(的存在)を人の似姿において捉える神人同型説が一定の合意を得ていることを出発点とし、そこから宗教を捉えることができるとした。人類が外界の事物を認知する際に人の似姿を見出すのは自然であり、例えば広告における商品の擬人化のように、現在においても多様な形で人類の思想



スチュワート・ガスリー氏

と行動の中に見られる。宗教現象は多様であるが、神(的存在)を捉える際の認知的基盤は人類に共通しているとした。

発題(三)「Is Japan a Lost Cause or a Sustainable Model? An Anthropological Perspective on the Contemporary Society」ウィリアム・ケリー氏(イェール大学教授)

ケリー氏は海外の文化人類学者が日本社会をどのように見ているかについて述べた。日本は、非西洋の近代社会として、西洋をモデルにした「近代」を問い直す興味深い事例であり、特に戦後は日本の研究者との協力関係の下で厚い記述が蓄積されてきている。例えばケリー自身身の庄内における調査から、伝統的とみなされがちな農村もまた近代化に対応して変化してきていることが、農作業や生活上の変容の具体的な例に触れながら示された。最後に、日本に限らず人文科学は世界的に厳しい状況に置かれているが、逆にグローバル化への対応という日本の課題に取り組むためには、人文科学的研究の地道な蓄積とその知恵が不可欠であると述べた。



ウィリアム・ケリー氏

発題(四)「アフォードダンスと生態学的倫理学の構築」河野哲也氏(立教大学教授)

河野氏は新たな生態学的倫理学の展望について述べた。一般的に倫理は、個人の心理に還元する心理主義、あるいは善の原則を想定する原則主義において説明されるが、そのどちらも現実の善悪の複雑系に対応することはできない。これに対して生態学的倫理学は、アフォードダンスという、個人の行為に対して環境の側から提供されるものを指す概念を用いて、個人と環境の関係性に目を向ける。ここで善は個人の活動可能性を増大することとされ、それに向けて両者間の関係を個別の事例に即して調整していくことが目指される。これには教育や福祉、そして法といった区分を越えた複合的なアプローチが必要となり、翻って人文科学の可能性はそこにあると論じた。

これら四発題を受けてコメントがなされ、総合討議が行われた。なお、本フォーラムの成果として、各発題と討議をまとめた内容を、来年度中に刊行することを予定している。

(文責・星野靖二)



河野哲也氏

第四十一回 日本文化を知る講座 「日本文化」研究のこれまでとこれから

講座の概要

第四十一回「日本文化を知る講座」は、平成二十七年(二〇一五)年六月六日、十三日、二十日、二十七日(いずれも土曜日)の四回にわたり、本学常磐松ホールにて開催された。

今回の講座は、昭和三十(一九五五)年に設立された日本文化研究所(平成十九(二〇〇七)年より研究開発推進機構内の一機関に改組)の設立六十周年の記念講座として、共通テーマを「日本文化」研究のこれまでとこれから」と設定した。

日本文化研究所で行われてきたさまざまな研究テーマのなかからいくつかの柱を取り上げ、これまででどのようなことが明らかにされてきたかを振り返るとともに、今日のグローバル化時代においてどのようなことが課題となっているかを論じることを目指した。具体的には、神道・国学研究、民俗学、日本文化研究の海外発信、日本文化と宗教文化の教育、の四テーマを取り上げ、時代状況の変化や社会への発信といった問題と関連させて、具体例を交えながら、各講師に講演いただいた。いずれの回も百数十名ほどの参加者が

あった。
以下、各回の概要(各講師による)を記す。

第一回 六月六日

「日本文化研究と海外発信」

講師 江上敏哲氏(国際日本文化研究センター情報管理施設資料課資料利用係長)

海外には、日本について研究する研究者・学生、専門家などがある。彼ら/彼女らが日本について発信してくれることで、日本の情報や魅力が世界にアピールされていく。その元となるのが日本で生まれた資料・情報であり、海外の日本図書館などを通じて、海外のユーザに伝わっていく。すなわち、日本の資料がいかに海外に伝わりやすいかどうかが、世界への発信力を左右するというこ



とである。その意味で、これは日本自身の問題でもある。しかし、実際に日本資料が海外に伝わるには多くの困難を伴う。国を越えるだけでも、ユーザには無駄な時間・コスト・ストレスがかかるものである。その解消には、日本側の幅広い業種の方の応援を必要としている。

日本資料を海外に伝えやすくするという意味では、デジタル環境の整備が有効なはずだ。しかし、日本ではその整備が深刻に遅れていると言える。統計を見ても、中国・韓国と比べると日本のデジタル資料の契約数が明らかに少ないことがわかる。欧米や中韓では、研究のデジタル環境が大きく整備されている。その中で、日本についての資料・情報だけが紙に頼るしかなく、ここにデジタル格差の溝が生じている。若い世代の大学院生や学部学生、一般の方など、デジタルの恩恵を受けないと自力で日本資料のアクセスすることが難しい人は少なくない。また、近年は横断的な研究が進み、日本が専門でない研究者が日本資料を求めることもある。このような人たちにしても、デジタル環境の整備が望まれる。

昨今、日本研究・教育の縮小など、欧米における日本研究の退潮傾向が懸念されている。背景には日本の経済的低迷や存在感の低下などがある。この傾向と、日本資料へのアクセスの障壁とは決して無関係ではないだろう。ユーザがどのような状況にあるかを理解した上で、支援することが必要であると私は考える。

第二回 六月十三日

「民俗学の新たな展開と展望」

講師 新谷尚紀氏(本学文学部教授)

創立六十周年を迎える國學院大學日本文化研究所の創立に関与した柳田國男は、日本民俗学という民間伝承の研究を生み出した。ところが、日本民俗学は、近代の西洋科学に由来しない分野であり、講座が官学に設けられることはなかった。実際、折口信夫の尽力により、昭和十五(一九四〇)年に日本初の民俗学講座が設けられた大学は、國學院大學なのである。

柳田國男による民俗学の研究方法は、書かれた記録に基づく単独立証法に対して、民間伝承の収集と比較研究に基づく重立証法である。伝承とは、過去と現在を結ぶ運動であり、その中に文化的な古層から新層への変化が認められる。例えば、柳田の「蝸牛考」に示されたような方言周圏論的な考え方は、グラデーシヨンの的に分布する民間伝承の事例差が、歴史的な年代差であることを示唆する。従って、より多角的な視点から民俗学に取り組むためには、現在の民俗事例だけではなく、文献記録や考古学的資料に関する知見が欠かせない。

ところが、戦後の民俗学では、柳田や折口が取り組んできた方法論が影を潜める一方で、文化の個性に重点を置き、個別の地域社会を定観測する社会人類学的な歴史研究が重視されていく。しかし、過去に私が明らかにしてきた通り、近畿地方に

よく見られる両墓制にせよ、多地域の調査に基づく比較研究法でなければ見えてこないことが多く、死のケガレを避けた両墓制が古く、かかる觀念の廃れた単墓制が新しい、という単純な理解は成り立たない。また、国立歴史民俗博物館の関沢まゆみ氏を代表とする盆行事の研究においても、十世紀から貴族社会を中心に触穢思想の強い影響を受けた近畿地方と、そうではなかった九州・東北地方の事例には、歴史的な変遷の段階差を見出すことができた。

このように、民間伝承の相違点から変遷論を問ひ、共通点から伝承論を問う研究法は、柳田・折口以来の伝統的な手法であると同時に、民間伝承学としての民俗学にとつて、今後ますます練磨していくべき方法論であることを強調しておきたい。

第三回 六月二十日

「グローバル化のなかの日本文化と宗教文化教育」

講師 岩井洋氏(帝塚山大学学長)

本講座では、「グローバル化」という現象について再認識するとともに、グローバル化のなかにおける日本文化の変容や、「宗教文化」(日本や世界の宗教の歴史や現状)に対する理解を深める「宗教文化教育」の重要性について述べた。

「グローバル化」とは、政治・経済・文化をはじめさまざまな分野において、国家や地域の枠組を超えて人々が緊密に関係するようになり、さまざまな現象が世界規模で起こるよう

になることを指す。これは、好むと好まざるとにかかわらず、われわれが巻き込まれている世界の状況である。一般に、グローバル化により世界が均質化すると考えられているが、実際には均質化とともに多様化も同時並行して起こっている。

さて、グローバル化のなかで日本文化はどのように変容しているのだろうか。さまざまな日本文化は、日本人の手を離れて、世界でさまざまなに再解釈されて広がっている。たとえば「弁当」はクールジャパン(かっこいい日本文化)のひとつとして世界に伝わり、「Benio」として通用するようになった。また、北野武監督の映画や宮崎駿監督のアニメのなかに、宗教性や精神性を読み取るような解釈も生まれている。これは、神社や寺院といった目に見える宗教ではなく、見えないような現象のなかに宗教性が潜んでいるという「宗教の拡散あるいは遍在」現象と言える。最後に、グローバル化のなかの宗教文化教育についてである。「グローバル人材」なるものが求められる現在、宗教文化に対する理解が重要である。たとえば、世界人口の約四分の一をムスリム(イスラム教徒)が占め、「ハラール」(許された)「合法的な」の意味)と呼ばれる教えに適合した商品の市場が注目されており、ビジネスにおいても世界の宗教への理解が不可欠となっているのである。一方で、われわれがグローバル化に巻き込まれている以上、日本の宗教文化についても説明を求められる機会が増えるであろうし、その

ための知識と能力が問われている。

第四回 六月二十七日

「中世神道研究の回顧と展望」

講師 伊藤聡氏(茨城大学人文学部教授)

本講演では、中世神道についての研究史を現代に至るまで振り返った。中世神道は、今日の神道とは大きく異なり、仏教に包摂された神仏習合のかたちが典型であり主流であった。それが近世に入り、中世神道すなわち仏教的な神道(両部・山王神道)や神道の中の仏教的要素への批判が、学問・思想として展開されていった。

近代に入ると、中世神道はさまざまな文脈で再評価されてくる。辻善之助が仏教史の中で中世神道を位置づけたのに続き、西田直二郎が中世における「反本地垂迹説」への反転を論じた。島地大等や、西田長男、鏡島寛之らの議論を経て、中世神道は神仏習合・本地垂迹説の単なる連続面だけでは捉えきれないとみなされ、反本地垂迹説に基づく理解が有力となった。これが吉田神道・伊勢神道の再評価へとつながった。他方、仏教界の各宗門でも仏家神道研究が進み、上田天瑞など、神仏一体の中世神道を再評価しようという議論も見られた。並行して、真福寺・金沢文庫・高野山などでの史料調査が進んだことも特記されるべきである。

続いて、戦後の状況である。神道研究自体は縮小したが、六〇年代までは戦前からの連続性をもって、西田長男・近藤喜博・久保田収・津田左右吉・村山修一らの書籍が刊行さ

れた。

七〇年代になると、「神道学」に留まらない各分野から成果が相次いだ。日本思想史では『神道思想集』『中世神道論』などが編まれた。国文学系からは、伊藤正義らの研究により「中世日本紀」「中世神話」概念が提出された。歴史学においても、黒田俊雄や桜井好朗らの研究が続いた。

八〇年代以降、まずは国文学における中世日本紀研究が定着していった。また、サブカルチャーやアカデミズムの外では、中世神道の神秘主義的側面などへの関心の高まりがあった。

そして現在である。伊勢・両部神道の成立過程研究では、密教的習合思想のみならず、禅文献の影響が決定的であったことが解明されつつある。天台宗学では山王神道の研究も著しく進んだ。吉田神道についても多分野からの成果が提出された。他にも、古代神話・文学研究との接合がなされ、中世日本紀研究に触発された成果が提出された。

また、とりわけ九〇年代以降は、中世神道についての新たな基礎資料の公刊が相次いだことも特筆すべきだ。関連研究書の数も増え、海外における研究も続く、盛んな状況にあると言える。

こうしたこれまでの中世神道研究の展開の中で、外的な影響の解明はかなり行われたと言えるのだが、思想・内実面における解明されるべき課題はまだ残されているのである。

(文責・深澤太郎・塚田穂高)

平成二十七年 國學院大學博物館活動報告

一、活動報告

平成二十七年度は、博物館の展示公開として特別展を一回、企画展を七回、特集展示を六回開催した(表1)。これらの展示公開に加え、本年度は、前年度に引き続き、文化庁の「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」に採択された「東京・渋谷から日本の文化を国際発信するミュージアム連携事業」(以下ミュージアム連携事業)を展開(10頁を参照)。ミュージアム連携事業として、各種展示やワークショップ、講演会、シンポジウム等を実施した(表2)。

二、展示公開

【特別展・企画展・特集展示】

・特別展「江戸のベストセラー『唐詩選』の世界」(会期：平成二十七年十月三日～十一月十五日)。概要：漢籍の受容を通し、アジアの文芸様式として普遍的であった漢詩、とりわけ江戸時代に爆発的に流行した『唐詩選』を取り上げた。わが国における『唐詩選』の出版を通し、その受容と応用の実際を探り、江戸時代の人々の目に映った中国の文化を紹介した(展示図録刊行)。

・企画展「収蔵品展」(会期：平成二十七年四月十三日～五月十七日)。概要：本学が蓄積してきた学術資料の中で、寄贈・購入・模造・修理物件のほか、従来展示される機会の少

なかつた資料の数々を紹介。校史分野から有栖川流の書跡等、神道分野から年中行事絵巻、考古学分野から縄文・弥生土器を展示した。

・企画展「教派神道の教祖と儀礼」(会期：平成二十七年六月一日～六月三十日)。共催：教派神道連合会。概要：平成二十七年が教派神道連合会結成一二〇周年にあたること、かつて本学で同連合会からの委託を受けて行っていた神道講座が再開されたことを記念して行われた展示。

表1 平成27年度 展示内容と関連事業

展示	会期	関連事業
特別展 江戸のベストセラー『唐詩選』の世界	10.3~11.15	ミュージアム トーク 10.10 12:30~13:00 10.17 12:30~13:00、14:30~15:00 赤井益久(本学学長)
収蔵品展	4.13~5.17	ミュージアム トーク 5.2 12:15~12:45 大東敬明(本学准教授) 5.16 12:15~12:45 石井 匠(当館学芸員) 大東敬明(本学准教授)
教派神道の教祖と儀礼	6.1~6.30	ミュージアム トーク 6.13 15:30~16:00 中山 郁(本学准教授) 6.20 15:30~16:00 井上順孝(本学教授)
企画展 明治国家と法制官僚 —井上毅歿後120年記念— 國學院大學学びへの誘い	7.11~8.7	プログラー 内覧会 7.10 17:30~19:00 齊藤智朗(本学准教授) ミュージアム トーク 7.18 13:30~14:00 齊藤智朗(本学准教授)
(SHIBUYA) ※	8.22~9.30	ミュージアム トーク 9.5 12:30~13:00 秋野淳一(本機構 PD 研究員) 9.12 15:30~16:00 石井 匠(当館学芸員) 9.26 15:30~16:00 上山和雄(本学教授)
神仏・異類・人—奈良絵本・絵巻にみる怪異—	11.21~2.7 前期:11.21~12.24 後期:1.8~2.7	ミュージアム トーク 11.21 14:00~14:30 針本正行(本学教授) 12.19 12:30~13:30 荒木優也(本学兼任講師、本機構 PD 研究員)
花鳥風月 柄鏡の美—服部和彦氏寄贈コレクションを中心として—	2.11~3.13	ミュージアム トーク 2.13 14:00~14:30 3.5 14:00~14:30 内川隆志(本学教授)
中世古文書をよむ	3.19~4.17	-
番附にみる天下祭(神道展示室)	5.2~5.24	-
夏の祭—祇園祭と天王祭—(神道展示室)	7.11~8.30	ミュージアム トーク 7.18 14:30~15:30 大東敬明(本学准教授)
近代日本におけるイスラム教—東京回教礼拝堂と回教学校—※	10.1~12.16	ワークショップ 10.4 12:00~16:00 「世界の宗教を知る」ワークショップ第2回イスラム教※
学徒出陣と國學院大學—出陣学徒の「ことば」—(校史展示室)	10.10~11.10	-
特集 戦後70年 戦没考古学徒の足跡—神林淳雄の遺した資料を通して—(考古展示室)	10.10~11.10	-
江戸の錦絵 上方の合羽帯※	10.27~11.15	-
相互貸借 特集展示 ともし火の系譜 —古代ランプからエダヤの祭具—	4.20~9.4	ミュージアム トーク 9.4 14:30~15:00 内島美奈子(西南学院大学博物館 学芸研究員)
宗門人別改帳にみる近世社会	9.5~12.23	ミュージアム トーク 12.12 11:00~11:30 野藤 妙(西南学院大学博物館学芸研究員) 12.12 15:00~15:30 安高啓明(熊本大学文学部准教授、本機構共同研究員)
異国イメージ I —紅毛人から阿蘭陀人へ—	1.8~4.23	ミュージアム トーク 4.23 14:00~14:30 安高啓明(熊本大学文学部准教授、本機構共同研究員)【予定】
貴重資料 レジの展示 出張展示 渋谷ヒカリエ8階	9.3~10.31	-
出張展示 天童市西沼田遺跡公園	12.23~2.16	-

※印はミュージアム連携事業実施項目

井上毅歿後百二十年にあたり、これを記念して、「梧陰文庫」の資料を中心に、日本の近代化にもとに尽くした人々と井上毅の業績を辿る巡回展示が行われた。(展示図録刊行)。

・企画展(SHIBUYA)(会期：平成二十七年八月二十二日～九月三十日)。後援：渋谷区、毎日新聞。概要：本学の所在地である、渋谷の二万五千年間の履歴書を読み解くというテーマで、渋谷の地中に眠る、先史時代から続く人々の営みの紹介をはじめ、渋谷の過去・現在・未来の

「時」と、そこから(SHIBUYA)という「場」を持つ、地の力を考える展示。本展示はミュージアム連携事業の一環として行われ、渋谷区や渋谷に関わる企業、神社、博物館・美術館や個人等にご協力をいただいた。会期中には渋谷道玄坂中央街の御神輿や、渋谷のスクランブル交差点をモチーフにした映像音楽作品、大和市所有のデコレーションハチ公など、当館としては、今までにない新たな試みの展示となった。

・企画展「神仏・異類・人—奈良絵

本・絵巻にみる怪異―(会期：平成二十七年十一月二十一日～平成二十八年二月七日)。概要：室町時代後期から江戸時代中期にかけて制作された彩色入りの写本「奈良絵本」を通して、そこに描かれた、現実にはあり得ない不思議なこと「怪異」を追った。本展示は、校史・学術資産研究センターの研究成果の一端を一般公開する機会ともなり、来館者に「怪異」が描かれた奈良絵本・絵巻を通して、古典文学に親しんでもらうだけでなく、物語の面白さや魅力を紹介した。

この他に、企画展「花鳥風月 柄鏡の美く服部和彦氏寄贈コレクションを中心として」(会期：平成二十八年二月十一日～三月十三日)、企画展「中世の古文書をよむ」(会期：平成二十八年三月十九日～四月十七日)の開催を予定している。

【相互貸借特集展示】
特集展示については、社会的関心が集まる周年行事や祭典、ミュージアム連携事業等に合わせたテーマ展示を、各常設展示室にて公開した。

【相互貸借特集展示】
大学博物館における学際研究をめざし、昨年度七月に締結した「西南学院大学博物館と國學院大學博物館との研究協力に関する協定」による事業として、相互貸借特集展示を両館を会場に各々三回、計六回実施した。今後も同研究計画に基づく特別展示・相互貸借展示や、これに伴う普及イベントの立案・実施を通して、教職員・学生の相互交流を促進するとともに、さらなる研究・教育活動の充実を目指していく。

【貴重資料レプリカ展示】

日本文化、歴史、精神性に思いを馳せる機会や、当館に興味を持っていただくことを目的として行われた企画。歴史的価値だけでなく、芸術性も併せ持った考古遺物や神道関係資料等のレプリカを、オフイスビルや商業ビル等のエントランスやフリースペースに展示。昨年度の霞が関ビルディングでの展示に引き続き、本年度は渋谷ヒカリエと山形県天童市西沼田遺跡公園の二ヶ所で展示を行った。今後も展示スペースを継続的に募集し、当館の更なる認知の向上を目指していく。

三、教育普及

展示以外の教育普及事業では、ミュージアム連携事業に参画する連携館や外部の施設・団体と協力しながら各種ワークショップ、講演会、フォーラム、シンポジウム等を実施した。十二月には國學院大學博物館国際シンポジウム・ワークショップ2015「博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究」を開催し、それに合わせて重要文化財「石枕」の実物資料の展示も行った(1頁参照)。

四、環境整備・営繕

表3 平成27年度入館者数(4月～1月)

月	(名)
4月	2,572
5月	2,894
6月	4,211
7月	5,514
8月	3,689
9月	4,075
10月	5,249
11月	4,266
12月	3,531
1月	2,785
合計	38,786

平成28年1月末日集計

表2 平成27年度 ワークショップ・講座・フォーラム等

開催日	内容	会場、講師等
7.25	夏休み特別ワークショップ「縄文土器づくり」※	会場：白根記念渋谷区郷土博物館・文学館、國學院大學博物館他 参加人数：29名
8.2	夏休み特別ワークショップ「探検！ミュージアム」※	会場：白根記念渋谷区郷土博物館・文学館、國學院大學博物館 参加人数：19名
8.7	「体感！浮世絵摺り実演・体験会」※	会場：國學院大學多目的ホール 参加人数：69名
8.7	「夕涼み浮世絵講座」※	会場：國學院大學常磐松ホール 日野原健司(白根記念美術館 主席学芸員) 藤澤紫(本学教授特別専任) 参加人数：110名
8.8 8.9	夏休み特別ワークショップ「勾玉づくり」※	会場：白根記念渋谷区郷土博物館・文学館、國學院大學博物館 参加人数：113名
9.5	美術文化フォーラム1「琳派400年記念 琳派 一受け継がれる美の系譜」※	会場：國學院大學常磐松ホール 山崎妙子(山種美術館館長) 中島千波(日本画家・東京藝術大学名誉教授) 藤澤紫(本学教授) 参加人数：230名
8.28	「世界の宗教を知る」ワークショップ 第1回ユダヤ教「シャローム！-ユダヤ教の習慣と儀礼を学ぶ-」※	会場：國學院大學博物館、日本ユダヤ協会 参加人数：24名
10.4	「世界の宗教を知る」ワークショップ 第2回イスラム教「アッサラーム・アレイクム！-渋谷のモスクでムスリム文化にふれる-」※	会場：國學院大學博物館、東京ジャーミイ 参加人数：26名
10.18	「世界の宗教を知る」ワークショップ 第3回修験道「お山は晴天、六根清淨！-相模大山修験道の道を歩く-」※	会場：國學院大學、大山阿夫利神社、山荘だいてう 参加人数25名
10.25	「世界の宗教を知る」ワークショップ 第4回道教「急急如律令！-横浜の道教寺院をめぐる-」※	会場：國學院大學博物館、横浜閼帝廟、横浜媽祖廟 参加人数：24名
11.14	美術文化フォーラム2「村上華岳と京都そして日本文化へ」※	会場：國學院大學常磐松ホール 第1部 講演会 山崎妙子(山種美術館館長) 上村淳之氏(日本画家) 第2部 クラリネットコンサート 篠生衛氏(國學院大學博物館館長) 吉田誠氏(クラリネット奏者) 参加人数：第1部 230名、第2部 205名
11.21	平成27年度渋谷学研究会ワークショップ まち歩き「渋谷の記憶を辿る～常磐松界隈を歩く～」※	渋谷名所各所 参加人数：30名
12.12 12.13	國學院大學博物館 国際シンポジウム・ワークショップ2015 「博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究」※	会場：國學院大學常磐松ホール 参加人数：12日 138名、13日 105名
1.24	ワークショップ「妖怪絵巻をつくらう！」	会場：國學院大學博物館 参加人数：46名

※はミュージアム連携事業実施項目

この他、文化庁事業区分「多言語化による国際発信」による「博物館における多言語サービスの充実」事業の一環で、当館の多言語化を推進した。多言語に対応した館のインフラ整備と当館のウェブサイトの構築が成された。その他、展示ケースや館内照明のLED化や演示具、機材の充実化を図った。

平成二十八年一月現在、今年度の入館者数が三万八千人を超え、前年度の年間入館者数(二万八千四百七十七人)を大幅に上回り、現在も記録を更新している。今後も多くの人々に活用していただける博物館運営を目指していく。(文責：網谷哲成)

平成二十七年 文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」 東京・渋谷から日本の文化を国際発信する

ミュージアム連携事業・報告

一、事業の目的

本事業は、平成二十六年文化庁支援事業「地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」に採択された「東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業」を発展的に事業推進するため、平成二十七年文化庁支援事業「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」に採択された「東京・渋谷から日本の文化を国際発信するミュージアム連携事業」を実施するものである。昨年度同様、國學院大學博物館を中核館とした渋谷区、山種美術館、東洋文庫で構成する國學院大學博物館地域共働連携事業実行委員会(実行委員長・赤井益久学長)が実施する事業である。

本事業は昨年度の事業同様、連携館の相互の知的・物的資源の活用と交流を図り、文化芸術・教育・地域振興等の分野で相互に協力し、文化の発展や地域社会の振興、学術研究の向上、人材育成、生涯教育に寄与することを目的とするものである。本年度はさらに「国際発信」に力点を置き、多言語化や海外への日本文化の発信を目的とする多様な事業が計画された。四月二十八日に実施された國學院大學博物館地域共働連携事業実行委員会会議において図られた事業の方針と、計画のコンセンサ

スに基づいて事業が進められた。

二、事業の概要

本事業は五つの事業の柱で構成されており、以下にその概要と報告を記載する。

①文化庁事業区分「地域に存する文化財の活用に向けた地域ぐるみの保存・管理」による「地域・渋谷の文化を発信する」事業

本学が位置する「渋谷」は、日本の新しいカルチャーを生む地として海外からも注目されている場所であると同時に、その地中には旧石器時代の遺跡も眠る長い歴史を持つ土地である。本事業では本学が推進する「渋谷学」の研究成果も用いながら、「渋谷の二万五千年間の履歴書を読み解く」というテーマで企画展示を行った。(SHIBUYA)と題した展示では、パネル展示に沿って「渋谷」の過去・未来・現在に関わる多くのモノが展示され、同時期に行われた近隣神社の例祭に関わる御神輿の展示なども行った。渋谷の地に関わる多くの企業や組織にご協力をいただき、地域の力を集結した事業となった。本展示のチラシは英語版でも作成され、外国人へも発信された。渋谷区との連携で行われた「渋谷の記憶を辿る」常磐松界隈を歩く」では、参加者は専門家の案内人

とともにハチ公を出発し、金王八幡宮、氷川神社を経て、連携館である白根記念渋谷区郷土博物館・文学館までを散策。実際に歩きながら渋谷の街が辿った歴史を感じるイベントとなった。

②文化庁事業区分「多言語化による国際発信」による「博物館における多言語サービスの充実」事業

中核館である本学博物館による、インターネットを通じた日本文化の発信に注力した。

具体的には、本学博物館ホームページの再構築を実施し、独立したホームページ内で、当館の多様な取り組みを効果的に公開することを目的とした。日本語コンテンツの再構築をベースに、各コンテンツの多言語化も行い、海外・在日外国人への訴求力の向上に努めた。

また、館のインフラ整備として、中核館の館内外サイン、リーフレット、ブックレット、及び常設展示の解説シートの多言語化を行った。基情報報は、日・英・仏・中・韓の五言語に対応し、館外にも英語のサインを設置。外国人来館者へ積極的に働きかける体制を整えた。中核館だけではなく、連携館の解説シートや展示パネルの多言語化にも着手し、連携事業体の外国人対応力の底上げを進めた。

③文化庁事業区分「地域とともにある美術館・歴史博物館」による「博物館を核にした地域の文化交流」事業

事業企画機関で行われた調査研究の成果を広く地域の人々へも公開することにより、各機関が地域における学びの場の一つとなることを目的として行われた。

「世界の宗教を知る」というテーマで企画された全四回のワークショップでは、それぞれ國學院大學が位置する渋谷・横浜の地域に根差した宗教施設を訪問、その宗教文化を体験することを行った。第一回「ユダヤ教」では、渋谷キャンパスの近隣、広尾にある日本ユダヤ協会にご協力いただき、実際にシナゴグでの金曜礼拝を体験、ラビによる講義も行われた。第二回「イスラム教」では、渋谷区代々木上原にある東京ジャーミイを訪問。礼拝に参加し、イマームによる質疑応答では盛んな



企画展「SHIBUYA」

議論が行われた。この回に因んでは、当館において「近代日本におけるイスラム教」というテーマで東京ジャーミイより借用した資料を用いた特集展示を行った。これによりワークショップに参加できなかった方にも本取組みを公開し、異文化理解の機会を提供することを試みた。第三回「修験道」は、渋谷を出発し、大山街道に沿って、日帰りで大山を登拝、大山阿夫利神社を正式参拝した。最終回である第四回「道教」では、横浜中華街にて関帝廟、媽祖廟を訪問し、参拝と解説を行った。一般に公募された参加者は予想を遙かに上回る人数で、毎回満員のイベントとなった。

地域に根差した異文化の体験・理解に関するワークショップとして、住民への日本文化・異文化普及活動を促進する事業となった。



多言語化されたリーフレット・ブックレット



東京ジャーミイにて(「世界の宗教を知る」ワークショップ)

④文化庁事業区分「地域のグローバル化拠点としての美術館・歴史博物館」による「日本文化研究拠点の国際連携」事業(詳細は1頁〜3頁)海外で日本関連の資料を展示、研究しているオランダ・イギリス・フランス・アメリカ・ロシア・オーストリアの博物館から担当の学芸員を招き、国際シンポジウムを開催した。三日間に渡って行われたイベントでは、初日に「フィールドトリップ」として、連携館である山種美術館や東洋文庫をはじめとした、都内三つの博物館と当館を巡り、各館の展示を見学した。主イベントである二日目、三日目のシンポジウム・ワークショップではそれぞれの博物館の現状を報告していただき、日本の博物館にどのような情報発信を求め

かが発題された。その上で、日本側の連携館等のパネリストと討議を行い、情報化時代といわれる現代の状況に求められる博物館の国際的ネットワークのあり方を展望した。各国で既に進められている展示品のデジタル化や国を跨いだ企画展の取り組みなどが紹介され、日本文化を発信していく上での具体的な課題に対する活発な議論が行われた。

⑤文化庁事業区分「新たな機能を創造する美術館・歴史博物館」による「日本文化を体験・実感する」事業

昨年度に引き続き、山種美術館と当館が、日本画を通して日本文化や歴史観を多様な手法で参加者に提供する企画を実施した。

美術文化フォーラムとしては、九月と十一月の二回、イベントを開催した。第一回は「琳派400年記念琳派―受け継がれる美の系譜」として日本画家の中島千波氏を招き、三つの講演を行った。第二回は「村上華岳と京都―そして日本文化へ」として、日本画家の上村淳之氏をお招きし、三つの講演を行った。この回に関しては、二部制とし、後半にてクラリネットコンサートを企画、日本美術と西洋音楽の融合への新たな試みとした。

体験型ワークショップとしては、

五回に及ぶイベントが実施された。「夏休み特別ワークショップ」は渋谷区と連携し、子供向けに企画されたもので、それぞれ「縄文土器づくり」「探検!ミュージアム」「勾玉づくり」の三つのイベントを実施した。いずれも白根記念渋谷区郷土博物館・文学館と協力して行われた。

また、他の文化団体との連携として、昨年度に引き続き、公益財団法人アダチ伝統木版画技術保存財団にご協力いただき「体感!浮世絵摺り実演・体験会」を実施。同日開催の「夕涼み浮世絵講座」では太田記念美術館にご協力いただき、日野原健司首席学芸員と藤澤紫本学教授による講座が開かれた。本事業に基づき、多くの参加者が集まった。

(文責・陣内理良)



多言語化された館外サイン

二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」活動報告

本事業は、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会の決定に基づき、学部横断型の学際研究事業であり、本学が立地する渋谷を研究領域とする「渋谷学」、地域・日本・グローバル化する社会を研究領域とする「共存学」から構成される。以下、本年度の「渋谷学」、「共存学」の活動内容を報告する。

「渋谷学」グループ

本年度は、再開発事業によって変わり行く渋谷駅周辺を調査対象として、渋谷駅西口に位置する渋谷中央街の関係者からの聞き取り調査を実施したほか、以下に述べるシンポジウム、研究会などを開催した。

第四回渋谷学シンポジウム「渋谷らしさの近未来」は、再開発事業を見据えながら、過去・現在・未来の「渋谷らしさ」をテーマとして、平成二十七年十二月十二日、五二〇二教室において開催された。「第一部 渋谷らしさの構築」東京五輪からTOKYO 2020までの渋谷」では、渋谷駅周辺が日本を代表する消費空間・業務地域となっていく過程において、「渋谷らしさ」(若者の街・ファッションの街・IT産業の街)がどのように構築され、変容したのか、そして再開発事業が目指す「渋谷の将来像」はどのようなものか(ハード面の開発とソフト面の強化を両輪とした街づくりによる「日本一訪れたい街」の構築)、各発題者か

らの報告が為された。そして、「第二部 渋谷の未来」では、従来の「渋谷らしさ」を再考しながら、再開発後の「渋谷らしさのあるべき姿」をテーマとして、会場参加者も交えた討論を実施した(発題者等は彙報参照。以下同)。

また、渋谷学研究会の共催シンポジウム(後援:地方史研究協議会・関東近世史研究会)として、首都圏形成史研究会創立二十周年記念シンポジウム「首都と首都圏」(平成二十七年六月六日、一二〇三教室)を開催したほか、國學院大學博物館・企画展「SHIBUYA」に関連して(十頁参照)、白根記念渋谷区郷土博物館・文学館、國學院大學博物館との共催事業として、平成二十七年年度渋谷学研究会ワークショップ「渋谷の記憶を辿る〜常磐松界限を歩く〜」(平成二十七年十一月二十一日)を開催するなど、都市・渋谷を多角的に研究する際のネットワーク形成や、地域・教育への還元も視野に入れた研究事業を実施した。

刊行物としては、『都市民俗研究』第二十一号(平成二十八年二月)に成果を掲載するほか、國學院大學研究開発推進センター渋谷学研究会編『渋谷開きがたり3 渋谷中央街を語る(仮)』(平成二十八年三月)を刊行する予定である。後者は、戦後の渋谷中央街の変遷と、そこで暮す個人の生活、そして再開発で大きく変わる現在の状況までを、三人の渋

谷中央街関係者にインタビューした記録を基に、渋谷における「共存社会」を念頭に置いて、編集・執筆したブックレットである。



第4回渋谷学シンポジウム
「渋谷らしさの近未来」

「共存学」グループ

東日本大震災以降、被災地調査を継続的に実施してきた「共存学」グループでは、本年度も引き続き岩手県大槌町の調査を実施したほか、以下に述べる研究会、シンポジウムなどを開催した。

本年度は、これまで計三回の共存学研究会を開催した。各回の発表者・タイトルは次の通りである(会場はいずれもAMC棟五階会議室)○六。第一回「加藤久子(研究開発推進機構ポスドク研究員)「アウシュヴィッツ収容所をめぐる歴史と記憶・和解と共存の歴史叙述に向けて、その可能性と限界」(平成二十七年五月二十日)、第二回「菅浩二(神道文化学部准教授)「訪問調査報告・朝鮮民主主義人民共和国につい

て」(平成二十七年六月二十六日)、第三回「ダニエル・フリードリック(マックマスター大学大学院博士課程)「宗教と過疎問題:人間中心アプローチによる挑戦」(平成二十七年七月三十一日)。

また、宗教・研究者エコイニシアティブと本研究事業との共催で開催された、第六回宗教と環境シンポジウム「めぐみ」への畏怖と感謝―神道的環境倫理の有効性―(平成二十七年十一月二十八日、常磐松ホール)では、研究者、宗教者が現在における地球規模の環境問題にどのように関与し得るか、実際の課題の検討も含めて、自然と人間との共存関係、神道的環境倫理を焦点とする討論を実施した。

その他、平成二十七年前期に開講した学部のオムニバス授業「國學院の学問(共存学)」では、「地域(ローカル)と世界(グローバル)」を学ぶ「共存学の問い」をテーマに、講師それぞれの研究成果が教育に還元された。

刊行物としては、『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第十号(平成二十八年三月)に成果を掲載するほか、広く一般に頒布するための冊子として、國學院大學研究開発推進センター共存学グループ編『共存学ブックレット 震災復興と大槌町(仮)』(平成二十八年三月)を刊行する予定である。後者は、大槌町における地域コミュニティの復興と神社、伝統芸能の果たす役割などに着目し、震災復興と「共存社会の構築」をテーマに編集・執筆したブックレットである。

(文責:宮本誉士)

彙報

会議

○全体

・平成二十七年第二回運営委員会、平成二十七年七月二十九日(水)

(持ち回り稟議)

・平成二十七年第三回運営委員会、平成二十七年十月十五日(木)十六時～十六時三十一分、若木タワ1地下一階会議室○三

・平成二十七年第四回運営委員会、平成二十八年一月十四日(木)十五時四十八分～十六時二十六分、若木タワ1地下一階会議室○三

・平成二十七年第二回企画委員会、平成二十七年七月八日(水)十一時～十一時五十分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十七年第三回企画委員会、平成二十七年十月七日(水)十一時～十二時十七分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十七年第二回人事委員会、平成二十七年四月三十日(木)

(持ち回り稟議)

・平成二十七年第三回人事委員会、平成二十七年九月二十五日(金)

(持ち回り稟議)

・平成二十七年第四回人事委員会、平成二十八年一月十四日(木)

○日本文化研究所

・平成二十七年第二回所員会議、平成二十七年七月一日(水)十一時～十一時三十分、A M C棟五階会議室○六

○日本文化研究所

・平成二十七年第三回所員会議、平成二十七年九月三十日(水)十一時～十一時五十七分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十七年第四回所員会議、平成二十七年十一月十八日(水)十一時～十一時四十分、A M C棟五階会議室○六

・平成二十七年第五回所員会議、平成二十八年一月十三日(水)十五時三十分～十五時五十分、A M C棟五階会議室○六

○学術資料センター

・平成二十七年第一回学術資料センター会議、平成二十七年九月十六日(水)十四時～十四時二十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二

○校史・学術資産研究センター

・平成二十七年第二回校史・学術資産研究センター会議、平成二十七年九月十八日(金)(持ち回り稟議)

○研究開発推進センター

・平成二十七年第二回研究開発推進センター会議、平成二十七年九月二十五日(金)十五時五分～十五時三十四分、A M C棟五階会議室○六

○國學院大學博物館

・平成二十七年第一回博物館会議、平成二十七年九月十六日(水)十五時～十七時、博物館ワークシヨップスペース

○全体

・第四十一回 日本文化を知る講座「日本文化」研究のこれまでとこれから、後援：渋谷区教育委員会、各回、十三時三十分～十五時、A M C棟一階常磐松ホール

○第一回 六月六日(土)「日本文化研究と海外発信」、講師：江上敏哲(国際日本文化研究センター)

○第二回 六月十三日(土)「民俗学の新たな展開と展望」、講師：新谷尚紀(國學院大學教授)

○第三回 六月二十日(土)「グローバル化のなかの日本文化と宗教文化教育」、講師：岩井洋(帝塚山大学学長)

○第四回 六月二十七日(土)「中世神道研究の回顧と展望」、講師：伊藤聡(茨城大学教授)

○公開学術講演会「現代宗教は古代宗教と何が違うか?」宗教進化論

再考」、平成二十七年十月二十四日(土)十五時～十六時三十分、A M C棟一階常磐松ホール、講師：井上順孝(國學院大學教授)

○日本文化研究所

・国際研究フォーラム、平成二十七年十月二十五日(日)十時三十分～十七時三十分、A M C棟一階常磐松ホール、パネリスト：Stewart E. Guthrie(米国、フォーダム大学)、William W. Kelly(米国、イェール大学)、河野哲也(立教大学)、篠田謙一(国立科学博物館人類研究部長)、コメンテーター：井上順孝(國學院大學)、司会：松村一男(和光大学)

○研究開発推進センター

・首都圏形成史研究会創立二十周年記念シンポジウム「首都と首都圏」(主催：首都圏形成史研究会、共催：國學院大學渋谷学研究会、後援：地方史研究協議会・関東近世史研究会)、平成二十七年六月六日(土)十三時～十七時三十分、國學院大學百二十周年記念一号館一二〇三教室、挨拶(趣旨説明)：上山和雄(國學院大學教授)、発題：「江戸首都論」大石学(東京学芸大学)、「幕末期の「首都」江戸と外交使節」吉崎雅規(横浜市歴史博物館)、「鉄道の開通と東京の商品流通」老川慶喜(跡見学園女子大学)、「東京都制(首都制度)問題の沿革」白石弘之(元東京都公文書館)、「大東京」から「大東京空間」へ：梅田定宏(多摩大学附属聖ヶ丘中学高等学校)、「首都圏

再考」

計画」の変遷―1950年代まで―」松本洋幸 (大正大学)

・ 神道文化会公開講演会「占いと神道文化」(共催)、平成二十七年六月二十七日(土) 十五時〜十七時四十分、百二十年周年記念二号館二〇一教室、講演1「おみくじの歴史」、講師 大野出(愛知県立大学准教授)、講演2「占いとは」、講師 加門七海(小説家・エッセイスト)

・ 明治聖徳記念学会主催公開シンポジウム「祭礼と芸能」(共催)、平成二十七年七月十一日(土) 十三時三十分〜十七時、A M C棟一階常磐松ホール、基調講演 山路興造(民俗芸能学会前代表理事)、発題 福原敏男(武蔵大学教授)、岸川雅範(神田神社権禰宜)、コメント 小島美子(国立歴史民俗博物館名誉教授)、高山茂(成城大学大学院講師)、司会 茂木栄(國學院大學教授)

・ 「渋谷の記憶を辿る」常磐松界限を歩く」(主催) 渋谷学研究会・國學院大學博物館、平成二十七年十一月二十一日(土) 十三時三十分〜十五時三十分、案内人 飯倉義之(國學院大學准教授)、服部比呂美(白根記念渋谷区郷土博物館・文学館学芸員)

・ 第四回國學院大學渋谷学シンポジウム「渋谷らしさの近未来」、平成二十七年十二月十二日(土) 十三時三十分〜十六時、五号館五二〇五教室、第一部「渋谷らしさの構築」東京五輪から TOKYO 2020 までの渋谷」、講師 田原裕子(國學院大學教授)、大友教央(東急電鉄株式会社)、第二部「渋谷の未来」こ

れからの渋谷らしさのあるべき姿」、デイスカッション 西樹(シブヤ経済新聞編集長)、大友教央(東急電鉄株式会社)、関谷のびこ(フリーカメラマン)、コーディネーター 橋元秀一(國學院大學教授) ・ 第六回宗教と環境シンポジウム「めぐみへの畏怖と感謝―神道的環境倫理の有効性―」、(共催) 宗教研究者エコイニシアティブ、「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」、平成二十七年十一月二十八日(土) 十三時〜十六時四十分、A M C棟一階常磐松ホール、基調講演 櫻井治男(皇學館大学教授)、パネル発表 黒崎浩行(國學院大學教授)、田中利典(修験本宗総本山金峯山寺長脇)、古沢広祐(國學院大學教授)、モデレーター 石井研士(國學院大學教授)

・ 「古事記学」の構築 国際シンポジウム「葬送の神話―東アジアの他界観と『古事記』―」、平成二十八年一月二十三日(土) 十三時三十分〜十七時三十分、A M C棟一階常磐松ホール、基調講演 俄亜ナシ族の宇宙観とトンバ教儀式「開路」、講師 鮑江(中国社会科学院社会学学研究所副研究員)、パネリスト 立石謙次(東海大学講師)、谷口雅博(國學院大學准教授)、討議司会 黒澤直道(國學院大學教授)

○ 國學院大學博物館
・ 國學院大學博物館国際シンポジウム「博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究」、平成二十七年十二月十二日(土) 十時〜十八時、

A M C棟一階常磐松ホール、パネリスト Mathias Forrer (オランダ、ライデン 国立民族学博物館)、Simon Kaner (イギリス、セインズベリー 日本芸術研究所)、Michel Maucuer (フランス、ギメ美術館)、Anne N. Morse (アメリカ、ボストン美術館)、Alexander Sinityn (ロシア、ピョートル大帝記念人類学民族学博物館)、コメントーター 井上洋一(東京国立博物館)、司会 中牧弘允(吹田市立博物館、国立民族学博物館)

・ 國學院大學博物館ワークショップ、平成二十七年十二月十三日(日) 十時〜十七時、A M C棟一階常磐松



「古事記学」の構築 国際シンポジウム

ホール、パネリスト Tona Pausch (東京大学)、Christophe Marquet (フランス、国立東洋言語文化大学)、日仏会館、Johannes Wieninger (オーストリア、オーストリア応用美術博物館)、内川隆志(國學院大學)、岡崎礼奈(東洋文庫)、三宅秀和(永青文庫)、宮崎克則(西南学院大学)、山崎妙子(山種美術館)、司会 笹生衛(國學院大學)

出張

○ 日本文化研究所
・ 遠藤潤・芹口真結子・齋藤公太「明治期国学・神道関係人物に関する史料調査」のため、平成二十七年九月八日(火)〜九月十日(木)、京都府京都市
・ 松本久史・芹口真結子・齋藤公太「明治期国学・神道関係人物に関する史料調査」のため、平成二十七年十二月二十六日(土)〜十二月二十七日(日)、京都府京都市

○ 学術資料センター
・ 笹生衛・大東敬明・吉永博彰・木村大樹、「本学所蔵『香取神宮神幸祭絵巻』に関する現地調査」のため、平成二十七年八月二十日(木)、千葉県香取市
・ 内川隆志、「第六十三回全国博物館大会参加」のため、平成二十七年十一月十八日(水)〜十一月二十日(金)、広島県呉市
・ 内川隆志・黒崎浩行・深澤太郎・

朝倉一貴・尾上周平、「金華山の現地踏査及びスタディーツアー引率」のため、平成二十七年十一月二十一日(土)～十一月二十三日(金)、宮城県石巻市・女川町

○校史・学術資産研究センター

・渡邊卓、「全国大学史資料協議会二〇一五年総会・全国研究会参加」のため、平成二十七年十月七日(水)～十月九日(金)、東北大学・東北学院大学

○研究開発推進センター

・古沢広祐・筒井裕・杉内寛幸、「宮城県石巻市における東日本大震災被災地の復興に関する現地調査」のため、平成二十七年五月二日(土)～五月五日(火)、宮城県石巻市

・古沢広祐・茂木栄・ノルマン・ヘイヴンズ・杉内寛幸、「岩手県における東日本大震災被災地の復興と支援活動に関する現地調査」のため、平成二十七年八月六日(木)～八月九日(日)、岩手県陸前高田市

・黒崎浩行・杉内寛幸、「岩手県上閉伊郡大槌町における東日本大震災被災地の復興に関する調査」のため、平成二十七年九月十九日(土)～九月二十二日(火)、岩手県上閉伊郡大槌町

・古沢広祐・菅浩二、「持続可能な開発に関するサミット参加」のため、平成二十七年九月二十四日(木)～九月二十九日(火)、アメリカ合衆国ニューヨーク

・茂木栄・高野裕基・杉内寛幸、「岩手県上閉伊郡大槌町における東日本大震災被災地の復興に関する聞き取り調査」のため、平成二十七年十一月十八日(水)～十一月十九日(木)、岩手県上閉伊郡大槌町

・谷口雅博・渡邊卓・小野諒巳・鶴橋辰成、「古事記」神話遺称地の調査のため、平成二十八年二月七日(日)～二月九日(火)、宮城県宮崎市・宮崎県(高千穂峰)・宮崎県西臼杵郡高千穂町・宮崎県日南市

・渡邊卓・小野諒巳・鶴橋辰成、「古事記」神話遺称地の調査のため、平成二十八年二月十二日(金)～二月十四日(日)、島根県松江市東出雲町・島根県安来市伯太町横屋・島根県松江市八雲町日吉・島根県出雲市猪目町

○國學院大學博物館
・内川隆志・深澤太郎・及川聡・天田顕徳・尾上周平、「世界の宗教を知るワークショップの下見および事前打ち合わせ」のため、平成二十七年十月十三日(火)～十月十四日(水)、神奈川県伊勢原市

・及川聡、「國學院大學博物館の外部団体との連携に対する検討・検証」のため、平成二十七年十月三十一日(土)～十一月一日(日)、島根県出雲市

・内川隆志、「西南学院大学博物館・國學院大學博物館『相互貸借事業特集展示』展示替え」のため、平成二十七年十一月十七日(火)～十一月十八日(水)、福岡県福岡市

・深澤太郎・大村冬樹・鈴木志穂・吉澤花織、「國學院大學博物館展示資料に関連する画像・映像収集の現地調査」のため、平成二十七年十一月十七日(火)～十一月十九日(木)、福岡県福岡市・糸島市・大宰府市

・井上順孝・今井信治・吉田尚文、「國學院大學博物館展示資料に関連する画像・映像収集の現地調査」のため、平成二十七年十二月十九日(土)～十二月二十一日(月)、長崎県壱岐市

・及川聡・大村冬樹、「天童市西沼田遺跡公園における本学博物館貴重資料レプリカ展示」のため、平成二十七年十二月二十二日(火)、山形県天童市

・深澤太郎・大村冬樹・鈴木志穂・吉澤花織、「國學院大學博物館展示資料に関連する画像・映像収集の現地調査」のため、平成二十七年十二月十九日(土)～十二月二十一日(月)、長崎県壱岐市

刊行物

○日本文化研究所

・國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所発行『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第八号(平成二十七年九月三十日発行)

・國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所発行、井上順孝編集責任『第12回学生宗教意識調査報告』(平成二十七年十二月十五日発行)

國學院大學研究開発推進機構
日本文化研究所年報

Annual Report of the Institute for Japanese Culture and Classics
Keigakugaku University

第 8 号



平成27年(2015)9月発行

資料紹介

香取神宮神幸祭絵巻



『香取神宮神幸祭絵巻』は、香取神宮において行なわれていた同宮から津宮へ神幸する祭礼を描いたものである。

この祭礼は中絶することが多かったが、明治八年に再興され、同十五年以降は午年に式年大祭として行なわれている。近くは平成二十六年四月に行なわれた。

本資料が、受け入れられた当時、錯簡があり、また題は付されていなかった。その後、他本との比較によって、『香取神宮神幸祭絵巻』の一本であることが確定し、本学所蔵本も、他本に準じて、この名称で呼んでいる。また、改装に際して錯簡を改めた。

本学所蔵本は絹本・着色で、縦二八・二糎、全長一一七〇糎の卷子本である。絹本であるのは、現存諸本のうち、本学所蔵本のみである。また、金泥や銀泥が用いられ、次に挙げる諸本に比べて、人物が細かに描写されている点に特徴がある。

『香取神宮神幸祭絵巻』は、本学所蔵本のほか、現在、次の五本が確認されている。

- ・大禰宜家本（紙本、着色、個人蔵）
- ・権檢非違使家本（紙本、着色、個人蔵）
- ・日本民藝館本（紙本、着色）
- ・旧多田家本（紙本、着色、香取神宮蔵）
- ・成田山仏教図書館本（紙本、着色）

この他、水戸彰考館本があったが、昭和二十一年に戦災によって焼失した。しかし、それ以前に撮影された写真を香取神宮が所蔵している。

これらの絵巻は、笹生衛教授によって、絵巻の表現、神輿、正神殿

の描かれ方から、A・B二種に分類された。

前者は故実を知るための絵巻であり、権檢非違使家本、日本民藝館本、旧多田家本がこれにあたる。

後者は鑑賞するための絵巻であり、大禰宜家本、國學院大學本、成田山仏教図書館本がこれにあたる。この系統の成立は、元禄十三年（一七〇〇）に香取神宮の主要な社殿が幕府により造営されたことと関わる。また個人蔵の『香取神宮境内古絵図』は後者の祖本と一対で制作されたことなどが明らかになっている。

祭礼行列の構成を権檢非違使家本を参考に記述すると、一基の神輿を中心に、神主、大禰宜、権禰宜、大神主らの神職、このほか獅子、八乙女、歌人（神楽男）、随兵らが加わっている。また、本学所蔵本では失われているが、他本の中には冒頭に香取の海と津宮ほかの社殿、三つの御船木、八竜神、大盾などの奉献品や威儀物が描かれているものがある。

このような祭礼行列の構成の一部は、京都における祭礼とも共通点があり、今後、東国における祭礼文化の受容や香取神宮史の中での位置づけを行いたい。

なお、本資料については本学図書館・デジタルライブラリーにて公開している。
（大東敬明）

訂正

機構ニュース一六号に掲載の資料紹介「有栖川宮職仁親王書幅」の翻刻に一部に誤りがありました。ここに訂正いたします。

祝の哥人々↓祝事を人々